

## 善導『觀念法門』の位置づけ

成瀬隆純

一

浄土宗の三祖良忠が先師の口伝として『法事讃私記』中に、善導の五部九卷の成立順序につき「上来試論『五部前後』と述べてより、この順位が是認され本書の撰述は第三番目に位置づけられてきた。そのため最初の成立とされた『觀経疏』と本書の間に生じる教理上の矛盾については、「衆機誘引」「從仮入真」というごとき無理な会通をもって対応しなければならなかった。

近年にいたり自由な立場からの善導教学の研究が盛んとなり、著作順位の想定も種々試みられてきた。最近では良忠説は逆転され、『觀経疏』をもって善導最後の著作とみなす学説が有力視されるにいたった。そこでこれら先学の研究を参考に『觀念法門』中の問題点につき、別の視点からの考察を試みたい。

二

本書を客観的にみるととき二つの問題点に注目すべきことがわかる。まず第一点は、本書は隋・唐時代の諸経録が欠本と判定した、いわば天下の孤経ともいふべき一卷本『般舟三昧經』を長文にわたって引用していること。第二点として、道綽・善導と同時代の浄土教家、弘法寺釈迦才の『浄土論』と念仏行者の実践法が酷似しているという二点である。

はじめに一卷本『般舟三昧經』について考察を加えることとした。

本経は現在の『大正新修大蔵經』に三巻本と前後して採録されて、いかにも古来より浄土教研究者に依用されてきたのではないかとの認識がもたれている。しかし『法経録』『大周録』『静泰録』『開元録』といった隋・唐代の諸経録は、いずれも本経を欠本と認定してその存在を否定しているのである。また中国本土で開版された現存のいずれの大蔵経にも入

蔵されることはなかった。では『大正蔵』はどのような経緯からこの経を採録することが可能であったのであろうか。それは『大正蔵』が底本とした『高麗版大蔵経』に本経が入蔵されていたことに起因するのである。そこでこの一卷本『般舟三昧経』と『高麗蔵』との関係につき追求することとする。

良忠の『観念法門私記』には一卷本の傳來に関して次のごとき貴重な記録を残している。

此一巻経既欠本也。然仁和寺二品親王長治二年（一〇九五）、從二太宰差專使、被レ請レ釈論疏鈔於高麗。高麗義天和尚疏鈔送進之時、同獻二一卷般舟經一。

この記事から本経は長治二年（一〇九五）に仁和寺二品親王寛行によつて、わが国へ將來されたことが知られる。しかも、幸いなことにこれとまったく符合する記事が名古屋真福寺に秘蔵される、契丹僧志福撰の『釈摩訶衍論通玄鈔』巻四に付された識語にあることを発見することができたのである。

寿昌五年（一〇九二）、高麗國大興王寺奉宣雕造正二位行権中納言兼太宰師藤原朝臣季仲、依仁和寺禪定二品親王仰、遣二使高麗國請來、即長治二年（一〇九五）、從二太宰差專使奉請レ之。

これによると『通玄鈔』の雕造は寿昌五年（一〇九二）であり、有名な義天の『高麗統蔵経』の開版に際し入蔵されたことが知られる。いま問題とする一卷本『般舟三昧経』がこの『通玄鈔』と同時に、わが国へ献上されたということは、

善導『観念法門』の位置づけ（成瀬）

本経も義天が諸国へ未伝の經典論書を探索した折に、いずこよりか將來されて稀觀本として開版され、わざわざわが国へもたらされたと思像することができるのである。しかし守其が撰した『高麗國新雕大蔵校正別録』には、その間の事情はまったく記載されていないので、『高麗蔵』への入蔵がいつ行われたのか確定することができない。一卷本の入蔵を明記する現行の大蔵目録が高宗代の新雕本の目録であることから推測するならば、義天の『統蔵経』開版からこの新雕本の雕造にいたるおよそ百五十年間ほどの期間が想定されるのである。

それではどのような経路をへて本経は朝鮮半島へもたらされたのであろうか。隋・唐代の経録に欠本と認定され、宋代以降中国本土で出版されたいずれの大蔵経にも入蔵されなかつた事実から判断するならば、この一卷本『般舟三昧経』は経録編纂者の目の届かない広い中国大陸のある限られた地域に秘かに伝えられていたと想定しなければならぬであらう。

ところでここに、昭和八年山西省趙城県の広勝寺で発見された『金刻大蔵経』の存在が注目される。本蔵経については発見後、蔣唯心氏が現地を訪ずれて『高麗蔵』との綿密な考証を行つて「広勝寺大蔵経簡目」を残している。おそらくこの調査に信頼をおかれたであろう小野玄妙博士は、『仏書解説大辞典』別巻の『仏典総論』中に「金版大蔵経目録（私案）」を作成されて、一卷本『般舟三昧経』の項目を記入されてい

るのである。先述したごとく、この一巻本は『釈摩訶衍論通玄鈔』と同時にわが国へ将来された事実を想起するならば、作者志福が遼僧であり、金はこの遼を征服して建国したという歴史的背景に目を向けるべきであろう。

遼・金という北方異民族が支配した地域は黄河流域の北側に広がる山西省を含む広大な領域であり、この範囲には文殊菩薩の霊場五台山もありまた玄中寺も立地していたのである。

したがって、長安・洛陽といった当時の仏教学の中心地からは距離を隔てていても、仏教とは因縁浅からぬ土地ということができるのであつて、この地に一巻本が行われていたとしても何ら不思議ではないのである。このことを念頭におき、いま玄中寺を中心に称名念仏思想の普及に努めた道綽の『安楽集』への引用にあたって道綽は三巻本の行品からの経文を基本に引きながら、称名念仏に重要な思想的根柢を与える語句として、一巻本のみに存在する『當念我名』を連想させる「常念我名」という一句をあえて追加挿入している事実注目させられる。「當」と「常」とは写誤とも推測され、道綽が一巻本を依用した可能性大ということができるのである。この事実とときに考察した『金刻大藏經』の検討結果と合わせ考へるとき、山西省のかざられた地域には一巻本『般舟三昧經』の存在が予想できるのである。以上の考証から、本經を長文にわたって引用する『観念法門』の成立地も自ずから

限定されてくると思われる。

### 三

つぎに『観念法門』に関しての第二の問題点の考察に移ることとする。本書には具体的念仏三昧の実修法として「入道場念仏三昧法」が説かれているが、これは迦才『浄土論』の中下の機根者を対象とした念仏実修の法と酷似しているということが指摘できる。

#### 浄土論

三者須<sub>レ</sub>專念<sub>二</sub>阿彌陀佛名<sub>一</sub>  
 號。須<sub>レ</sub>別莊<sub>二</sub>嚴一道場<sub>一</sub>、燒  
 香散花幡燈具足。請<sub>二</sub>一阿  
 彌陀佛<sub>一</sub>安<sub>二</sub>道場內<sub>一</sub>、像面  
 向<sub>レ</sub>東人面向<sub>レ</sub>西。或七日  
中略或十日等  
 成省<sub>二</sub>睡眠<sub>一</sub>除<sub>二</sub>去散亂<sub>一</sub>。唯  
 除<sub>二</sub>大小便利及與<sub>二</sub>食時<sub>一</sub>、  
 一<sub>レ</sub>心專<sub>レ</sub>念<sub>レ</sub>悶即立念、不<sub>レ</sub>  
 須<sub>二</sub>禮拜旋遶<sub>一</sub>、但唯念<sub>レ</sub>佛七  
 日滿。出<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>後、行住坐  
 臥閑時即念、常念<sub>二</sub>佛名<sub>一</sub>。

#### 観念法門

欲<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>三昧道場<sub>一</sub>時、一依<sub>二</sub>佛  
 教方法<sub>一</sub>、先須<sub>レ</sub>料<sub>二</sub>理道場<sub>一</sub>、安  
 置尊像<sub>二</sub>香湯掃灑<sub>一</sub>。若無<sub>二</sub>佛  
 堂<sub>一</sub>有<sub>二</sub>淨房<sub>一</sub>亦得<sub>二</sub>掃灑<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>  
 法取<sub>二</sub>一佛像<sub>一</sub>西壁安置。行者  
 等從<sub>二</sub>一月一日<sub>一</sub>至<sub>二</sub>三十八日<sub>一</sub>(中略)  
 行者等自量<sub>二</sub>家業輕重<sub>一</sub>、於<sub>レ</sub>此  
 時中<sub>二</sub>入<sub>二</sub>淨行道<sub>一</sub>、若一日乃  
 至<sub>二</sub>七日<sub>一</sub>。(中略)於<sub>二</sub>道場中<sub>一</sub>、  
 晝夜束<sub>二</sub>心相續專心念<sub>二</sub>阿彌陀  
 佛<sub>一</sub>、心與<sub>二</sub>聲相續唯坐唯立、  
 七日之間不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>睡眠<sub>一</sub>。亦不<sub>レ</sub>  
 須<sub>二</sub>依<sub>二</sub>時禮佛誦經<sub>一</sub>、數珠亦  
 不<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>捉、但知<sub>二</sub>合掌<sub>一</sub>。

『観念法門』中には「量家業輕重」「酒肉五辛誓発手不捉口不喫」という表現があることよって、ここでの対象者が在家の信者であることがわかる。したがって中下根の人たちということであり、両書は対象者も同じく、実践内容も同じであつて、文章表現が少しく異なるだけという事実が確認されるのである。また『観念法門』には右に引用した前後に『浄土論』があげられる、懺悔・発菩提心・觀察・廻向等の必要性も説かれて、両書には多くの共通点が見出せる。

『浄土論』には、いまみた中下根の対象者の前に上根の人（出家者）についても、念仏と五念門の実修を内容とした実践法が説かれているが、『観念法門』ではどのような扱い方をしているのだろうか。

本書では冒頭に「依<sub>二</sub>観經<sub>一</sub>明<sub>二</sub>観仏三昧法<sub>一</sub>」と標示して、以下に具体的に座法を説き、引き続いて阿弥陀仏の相好を順観・逆観十六遍くり返すべきとして細部にわたる説明を加え、最後に「住<sub>二</sub>心向<sub>一</sub>眉間白毫<sub>二</sub>極須<sub>一</sub>捉<sub>二</sub>心令<sub>一</sub>正<sub>二</sub>更不<sub>一</sub>得<sub>二</sub>雜亂<sub>一</sub>即失<sub>二</sub>定心<sub>一</sub>難<sub>二</sub>成<sub>一</sub>」とこの法が『観經』の十三観による定心三昧であることを明言して結んでいる。引き続き文を改めて、持戒・念仏・誦經・礼讃の実修にあたっては大いに精進なることを勧めて、これに耐えうるならば上品上生間違いなしと断言している。すでに「定心」といい、いま「持戒・上品上生」ということは、この観仏三昧の実修の対象者は出家者で

あつて、上根であることを意味していると理解される。すなわちこの観仏三昧法を全体として捉えれば『浄土論』中に迦才が上根人の実践法として明示した、念仏と五念門を修すべしとの方法論と内容的に一致し、両者ともに出家者（上根人）を対象とした実修法であると読みとることができるのである。このような両書の共通性は偶然に一致したものでなく、おそらく両者に共通する根本資料の存在が予想されうるのである。

『浄土論』の序文には、著者迦才自身が道綽の『安樂集』を人びとに紹介するにあたり、「使<sub>二</sub>覺<sub>一</sub>之者宛如<sub>二</sub>掌中<sub>一</sub>耳」と述べて、かれが道綽浄土教のすべてを本書で解説する決意を表明している。この文意から本書中に示された念仏実践法は、迦才の創意工夫によるものではなく、玄中寺を中心に道綽が行っていた行儀作法を整理して『浄土論』中に祖述したものと理解されるのである。他方、一卷本『般舟三昧經』の流伝地域の考証から、本經が隋・唐代に存在したのは、後に遼・金によつて支配された山西省内に止まるものと判断され、本經をもつて念仏三昧法を説明している『観念法門』の成立地も、この地域内に限定するのがもっとも合理的な判定と思われる。

## 四

『統高僧伝』巻二十玄中寺道綽伝を参照するならば、記事中に「綽般舟方等歳序常弘」とあり、また巻二十四曇選伝によると、道綽は太原義興寺において寺主智満とともに『方等經』によつて、方等懺法を修していたことを伝えている。これらの記事から推測するならば、すでに道綽自身が玄中寺を中心として『般舟三昧經』による念仏三昧の実修と、『方等陀羅尼經』による方等懺法を實行していたことが知られる。また『安樂集』中には、しばしば『観念法門』が引用されて、観仏三昧についての説明が行われている。これらの事実を総合して考慮するならば、『観念法門』中に説かれる観仏・念仏両三昧法が、すでに玄中寺において寺主道綽の念仏布教に採用されていたと判断しても矛盾が生じないことになるであらう。

ところで本書に説く「入道場念仏三昧法」と天台智顛の『摩訶止観』にみえる常行三昧、半行半坐三昧に着目して、善導と智顛との関連性が指摘されている。しかし一卷本『般舟三昧經』流传地域の制約から本書の成立地を山西省とするならば、当時善導は道綽の弟子として修業中であり、本書のごとき具体的実践法を創案するような立場ではなかったと考えられるのである。

すでに考察したごとく『統高僧伝』中に智顛と道綽との密接な関係が指摘され、また本書と迦才『浄土論』中の念仏実践法の共通性に着眼するならば、本書の原形は玄中寺の道綽によつて組織立てられた、『唐書』芸文志にいう『行図』一巻であつた可能性が考えられる。善導は玄中寺を去るにあたり、道綽浄土教の実践法を長安へ広めるために同書の要点を写しとり、念仏の功德を証明するための経証を抜粋編集した五種増上縁義一卷を合冊して、その後の長安布教に活用したものと想像される。したがつて、本書は韶州大梵寺における六祖慧能の教説を弟子法海が集記した『六祖壇經』を彷彿させるものがあり、尾題に付せられた「經」の一字も本書の権威づけの意味が込められていると推測される。以上の考証から本書は唐代初期における浄土教徒の実態を活写した、貴重な書物と位置づけることができるのではなからうか。

1 神尾式春『契丹仏教文化史考』一一九頁

2 蔣唯心「金藏雕印始末考」現代仏教学術叢刊一〇・二二五頁。

3 藤原幸章『善導浄土教の研究』六一頁、『同書』一三七頁。

〈キーワード〉 観念法門、善導、道綽、般舟三昧經

(早稲田大学講師)